

「生理食塩水で乳管を洗ってからいちばん奥まで覗いてやからな」

以前藪原に受けた乳房への注射とは比べものにならないくらい生理食塩水が流し込まれているのがわかりました。乳管を押し広げ、ズキンズキンとした痛みを起しながら乳房の内部の隅々まで行き渡ってゆくのを感じられ、左右の乳房はアンバランスな姿に変えられてしまいました。針を残したままチューブを抜くと、噴水のように血が混じったピンク色の水が吹き上がりました。

「右もだ」

プジの代わりに太い針を差し込まれ、右の乳房も膨らまされてゆきます。徐々に膨らんでゆく右の乳房とは対照的に左の乳房はほとんど水を溢れさせながら小さくなってゆきました。左右の乳管を綺麗にされ、今度は乳管ファイバーが体の中に進入してきました。とつとつ乳房の中身を奥まで覗かれてしまいます。肉が詰まっていると思っていたおっぱいの中は、蟻の巣のように枝分かれし、カメラから吹き込まれる空気に押し広げられその通路を開いてゆきます。

「うまいな、どこにもひっかからなかったじゃないか」

「変態女は乳管もガバガバに広いんじゃないっすか？病変も無いし練習にならないっすよ」

「それじゃあ実験でもやってみるか」

「そうですねえ」

「どうしましょうかねえ、乳腺にびっしりカラシを詰め込むとか」

「乳管をおもいつきり拡げて乳管ファックが出来る体にしてみようか？」

「いや、時間かかるし……そうだ！」

カメラが引き抜かれ、乳首の穴にまたプジーが差し込まれました。

「さて、何本入りますかね」

「えっ、やめてっやめてっくださいっ無理ですっ一本で限界です、お願いっやめてえええ」

私の泣き声などお構いなしに乳首に二本目のプジーが差し込まれました。

「いいいいっいたいっ無理ですっ許してくださいっ」

乳首にある乳管は全て探し当てられ、それぞれ細いプジーを突き刺してゆきました。右に三本、左に四本の金属棒が信じられない深さまで乳房に潜り込み、まばらな銀の花のようにされています。

「うあああ、私の乳首が……これ以上虐めないで乳首が壊れちゃいます……」

「乳首だけじゃないぜ、面白い実験してやるから待ってろ」

プジーが抜かれ、一番大きく拡張された乳管からなにやら小さな白い粒をどんどん入れていきます。

「ああ酷いことしないでください、いやだあおっぱいに変な物入れないでええ」  
左右の乳首はゴム手袋に摘み上げられ、肉の袋に詰めるように乳管から溢れた粒をプジ―でグイグイと乳房の内部まで押し込まれています。

「今入れているのは炭酸水素ナトリウムだ」

「はあはあはあ？」

「結構入ったぞ。まあこれだけじゃ分からないだろうな。乳首は塞ぐぞ」

真っ赤に腫れ上がった乳首の根本がゴム管で括りあげられ、クリップで固定されました。太い針の大きな注射器を持った男達が私の両脇に立ち、その針から滴る透明な液体を私の口元に落とししました。

「きやつ酸っぱい……」

「クエン酸だ。これをおまえの乳房に直接注入する。炭酸水素ナトリウムってな、重曹だよ。おまえの乳管に詰め込まれた重曹にこのクエン酸が染み渡るとどうなると思う？」

周りの男達が笑い声を上げました。

「えっ！えっ！いやっいやっ怖いやめてくださいっ」

「訳も分からず怖がるなよ、ほら、これを口に入れろ、そうだ。そのままあけてろよ」